

総合学習の意義

国際関係学部 国際言語文化学科 学部生

総合学習とは、学校生活と一般社会を結ぶ架け橋である。教科の枠を超えた複合的な学習や、日ごろの勉強では手が届かないものの社会生活では重要となる事柄を扱い、子供たちの問題解決能力・資質の向上を狙いとして行われる教科である。そしてこの学習は、なにより子供たちの探究心を前提に行うものである。しかしながら、私にとって「総合学習の時間」は、所謂「自習の時間」であり、これといった印象のないものだった。それは、総合学習が持つ自由度が裏目に出た結果であろう。今回、集中講義を受けたことで、そもそもの総合学習の位置づけ、如何にして「総合的」に探求させていくか、という教える側の視点を得た。そして、実際に私たち受講者は「現代の日本が抱える諸課題」をテーマに、いかに総合学習に落とし込むかを検討した。1週間少々のグループ活動とその後の調整を経て、私は知ること、考えること…まさに「探求すること」の醍醐味を味わうことが出来た。しかし同時に、己の知識量の乏しさと視野の狭さを反省することとなった。そこで、以下に活動過程で考えた「総合学習」に取り組む際の留意点を示したいと思う。

まず、生徒たちの「専門性」に関する問題である。今回グループワークは、食品栄養・国際関係・経営情報学部と、それぞれ別な分野に専門性を持つ学生が集結し行っている。当然テーマによっては全く専門外のことを扱うこととなる。そのような中で、いかに学習テーマに対する理解を深めてゆくか、そして専門に学ぶ者には持てないであろう斬新で柔軟な価値感や考えを提示していくことができるかが、実はグループワーク及び成果物を深化させるための要だったのではないかと感じている。

一方で、専門分野について扱う際には、自分たちの持つ知識やこれまでの学びを「問い直す」ことが必要である。貧困・セクシャリティ・男女格差・家族の在り方…など、総合学習で扱うべき諸問題は、見方や考え方からしてその時の文化や風潮を色濃く反映する傾向にある。また、それに付随する研究や調査も、時代によって結論が変わることがある。私たちはそのうちの一部分を学んできたにすぎず、学んだこと＝問題の全容ではないことをわすれてはならない。そして、これらの問題は、そもそも絶対的な正解はないことも肝に銘じなくてはならなかった。だからこそ、既存の学びだけに頼り切らず、まさに問題の本質を「探求」していくことで、自分なりに学びを再構築していく必要があるのだ。まずは自分の持つ価値観が一方的な「偏見」でないかを客観視し、そして、問題の真の核は何処にあるのかを慎重に吟味していくべきなのだ。

この振り返りと問い直しの作業は、個人レベルでできることばかりではない。やはり時として、メンバー同士のぶつかり合いや話し合いが大切だ。他人の価値感や考え方を取り入れ、自分のものと比較しながら、導いていく、この過程に「探求」の意味があると考える。

最後に、やはり総合学習は、小学校から高校にかけて継続的に行うことが大切だと考える。私たちが、2週間+ α で問うて来たことは、本来高校生までに一度は経験しておくべきものだった。学校という鳥籠の中では見えづらい、しかしいつか必ず直面する諸問題を知らせぬまま若者を社会に出しては、いつまでたっても我々の生活も社会も政治も改善されない。さらに若者の「問題対峙力」の低さは、そのまま選挙投票率や政治関心の低さに直結するだろう。だからこそ、社会に蔓延る諸問題を知り、それらに真摯に対峙する力と解決するための「探求心」を、総合学習を通じて鍛えていくことが必要なのだ。そして教師陣は、生徒たちに社会の厳しさを教えつつ、解決の術を共に考えていく力を磨いていかねばならないと思うのである。

以上、簡単ではあるが私見を述べさせていただいた。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった先生方、私と共に問題に向き合ってくれた班員のみなさん、今回深掘りできなかった他の問題を提示してくださった受講生の皆さんに感謝の意を表し、擲筆することとする。